

37. 5. 10

京都新聞 (朝刊)

昭和37年5月10日

木曜日

(2)

社説

この声を国民のものに

わが国の指導的な科学者、文化人を集めてひらかれた科学者京都会議は、核実験反対と平和憲法擁護の態度を明らかにし、三日間にわたった画期的な話し合いの幕を閉じた。この会議の最大の意味は、わが核物理学の最高峰にある湯川、朝永、坂田三博士の提唱によって開かれた点にある。それと併せて、この会議が、科学者の、さらに端的には核物理学者の良識と良心をはかる格好の場になると考えられたからである。

会議終了後に発表された声明は、たしかにわれわれの期待に答えるものであった。世界が、核実験のない核軍備競争の恐怖にさらされている現状分析から、平和確保の道が完全軍縮の実現以外にないことを強調しているのは、まことに当然であった。また完全軍縮が、いわゆるフルフルフというか、水ももら

さぬ国際管理の下に行なわれねばならぬとしているのも、まったく同感である。が、何よりも注目されるのは核兵器発達に直接関係ある核物理学者の側から、核兵器あるいは核実験のもつ悪が、率直に指摘されたことである。さらにいえば東西対立の現状も核兵器をいわば国際社会の必要悪とするものではないことがはっきりとのべられたことであらう。

またこの会議の第一回が、京都で開かれたことも、一しお感銘深いものがあつた。わが国の文化は、ここに凝集して伝承されているからである。そしてその文化をさらに後代に伝えていくためには、平和をこそ守らねばならないからである。

それでも不満がないわけではない。その一つは、これが科学者会議を称している点である。日本の良心の、そして良識の結集体であるためにはいつまでも科学者会議であつて

はなるまい。事実、出席者の顔ぶれはすでに科学者ばかりではない。ともあれ、京都であげられたこの声は、単なるエリートたちの声だけにとどまらずは無意味である。国際的なよびかけも必要であらう。が、何よりも、これを真に国民の声にする努力が必要であらう。

c092-015-026